昭和39年6月10日　発行

著作者　島田一夫
発行者　矢貴東司
印刷者　北山茂

銀座特信局

発行所　株式会社　桃源社
東京都中央区日本橋蛎殻町 1—12
電話（671）4001～2番
振替東京64351番

¥ 290.

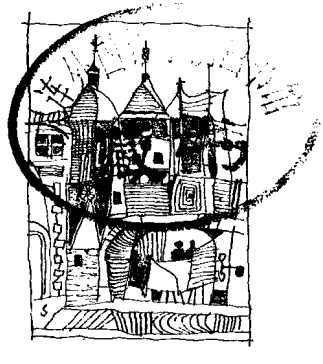
落丁・乱丁の節はお取替え致します　1964 ©

日文 701712829

280318

銀座特信局

島田　一男



ポピュラー・ブックス

銀座特信局

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

1

正月四日の銀座裏は、街全体がブツクサと文句を言っていた。
筑波颪にカサカサ揺れる門松はジダンダを踏んでいるようだし、ヒラヒラと翻るしめ縄の飾りは白目をむき出しているようだ。
——馬鹿にしてやがる。これじゃ折角の正月もあがったりだ……。
その通りである。元日からの三日間、つまり正月三ガ日の銀座裏が淋しいのは例年のことだ。が……、四日は御用始め……。この夜からパッと銀座八丁の灯し火が活気を呈することになるのだが、今年はその四日が土曜日に当り、五日が日曜……。これでは六日まで銀座は閉店休業というわけだ。
——六日になっちゃ正月気分は吹ッ飛んじゃうじゃないか……。
門松氏がボヤく。
——そうなのよ。普段だって、土曜・日曜の夜は商売にならないんだものさア……。
シメ縄嬢が溜め息をつく……。
「——どっちみち同じだよ。暮れのうちからこちとらアからッケツなんだ」

新京都日報東京支社通信部の窓から、淋しい銀座裏を見降しながら、こんなことをつぶやいたのは百根だった。

暮れのボーナスは史上空前と言われた。全国で総額八千三百億円……。昨年度より七百億円増……。

が……、それは百根のボーナスには無関係のことだ。手取り六万とちょッぴりの袋から、半分以上を前借りで差ッ引かれた。

残り三万足らず……。これが暮れのうちにパー……。

ネクタイ一本買ったわけじゃない。師走の街で拾った女と、烏森裏の旅館へシケ込んで、ふッと夜中に目をさましたら、女とボーナス袋が消えていた。

よくあることなんだ。枕さがし、つつもたせ……。東京の〝女〟は油断が出来ない。

それを承知で拾った女だ。現金を洗いざらい抜かれたって、百根は別にくやんではいない。

「——昨年はツイてなかったんだ……」

そう考えるだけだ。

窓からの眺めはつまらなかった。——いつもは尻からげした女中達の掃除姿が楽しめるま向いの小料理屋〝面影〟は、ピッタリと窓を閉めている。裏の芸者置き屋〝新小松〟の二階も雨戸が閉まっていた。

「——面白くねエなア……」

百根は、通信部長席に飾ってある〝お飾り〟の餅を割って、電熱器の上へジカに並べた。

この電熱器は、暮れの二十八日の夜から、ずッとつけッ放しだ。それも、一ツではない。支社長室や業務部の部屋から集めて来た電熱器三ツのニクロム線が、カーッと赤く光っている。

そのうちの二ツには、大きな薬罐がかけてあり、シュンシュンと蒸気を吹き出している。

これで、椅子を並べ、新聞紙を二、三十枚かぶって寝る。結構あたたかい……。三年前に部屋代を踏み倒して下宿を飛び出して以来住所不定の百根は、冬場はたいてい通信部で寝ることにしている。

「――いたなア……」

コンガリ焼けた餅を一ツ、口の中へ放り込んだ時、通信部長の塩田と、文化・スポーツ担当の加藤が入って来た。

「どうしたんです?」

「四日だぜ。仕事始めだ」

「だけど、支社は六日から……。まだ正月でしょう」

「正月さ……。それにしてわや、昨年来始めて会ったと言うのに、――どうしたんです……と言う挨拶はないやろ」

「ハハハ……、新年おめでとうござい……なんて、聞きたいですか?」

「聞きたかアねエよ。だけど、めでたい話、聞かしたろか?」

塩田は、チラッと加藤と顔を見合わせると、内ポケットから封筒を取り出して、ポンと、百根の前へ置いた。

「銭が入ってるみたいな音だなァ」
「銭が入ってるのや。五万円……」
「これを、どうするんです?」
「百さんのポケットへ入れるのさ」
百根がちょいと首を傾げた。
「お年玉ですか?」
「それほど景気のいい新京都日報じゃねエよ」
加藤が苦が笑いをしながら言った。
「出張旅費の仮払いさ」
「僕が? 出張? そりゃ駄目だ」
「どうして?」
そうたずねる塩田へ、百根が肩をすくめてみせた。
「いま一月ですよ」
「正月四日や、きょうは」
「鹿児島へでも行くんですか?」
「東京支社のうけ持ちは、浜松以東なんだ」
「でしょう」
「百さんに行って貰うのは、越後小出……」

「聞いたことがないですよ」
「新潟県や」
「寒いでしょう?」
「雪の越後やからなア。東京よりは寒いわいな」
「やっぱり駄目ですよ。僕は東京でも、寒い日は外へ出ない主義ですからねェ」
加藤が、クスリッと笑った。
「オーバーか?」
「そう……。僕はレインコート主義なんだなア」
「オーバーを持っていねエと言えよ」
――ふン……百根が鼻を鳴らした。
「部長、鹿児島か奄美大島か、とにかく温かいところじゃいけないんですか?」
「残念やなア。加茂紅の娘は、越後小出から奥只見の方へ入った大湯スキー場で死んでいたんだ」
「――加茂紅?!」
京都府の東京事務所を始め、在京の京都関係機関を担当している百根は、加茂紅の名を知っていた。
何百年か続いた京都のしにせである。むかしは紅の専門店だったのであろう。いまでは新しい化粧品メーカーとして、株式会社加茂紅本舗と名乗り、東京に支店を置いている。百根は一度も行っていないが、支店は日本橋の三越本店の近くにある筈だ。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

「遭難ですか？」
「小出警察からの連絡では自殺と言うことや」
「つまらねェところで自殺しやがったなア」
加藤が、口もとに薄ら笑いを浮かべた。
「奄美大島ででも死んでりゃアよかったと言うわけかい？」
「そうだよ。雪の中へ出かけてくものの身にもなってくれッてんだよ。何ンだって、そんなとこで死んだんでしょう？」
塩田が、五万円の封筒の上へ、ポンと、セルロイドの定期券入れを置いた。——国鉄から支社が貰っている一等パスだ。
「なんで死んだか、それを調べるのさ」
「どうしても、僕を行かせる気ですか？」
「さッき、僕のところへ加藤君が年始に来てくれてるところへ、本社から電話が入った。——加茂紅の娘が越後で自殺した。何かと京都では話題になっていた女なんだ。京子雪に死す……と、一発特電を打たせてくれ……ッてね」
「京子？　美人みたいな名だなア」
すると加藤が、大きくうなずいた。
「美人さア！」
「知ってるのかい？」

「ミス・京洛の有力候補だったそうだからなア」
「よし！」
百根は、加藤が着ているオーバーに手をかけた——
「これ、貸してくれよ。越後から帰ってくるまでいいから……」

2

清水トンネルを抜けたとたんに、百根はギョッとした。——凄まじい雪が、殴りつけるように車窓を叩くのだ。
信じられぬことだが、山一ツで、東と西とは別の世界だった。
十三時十五分上野駅発の新潟行き急行〝越路〟……。東京を出る時は、ちょいとからッ風は吹いていたが快晴だった。
それが、高崎を過ぎる頃から、薄曇りになった。水上から湯檜曽にかけては、チラチラとこな雪が舞っていた。そして、清水峠の二ツの環状トンネルを通った。とたんに、白ガイガイたる大雪原へ放りこまれてしまったのである。
「——くそったれめッ！」
百根は、黄色いアノラックの袖をかき合わせるようにして、雪がへばりついた窓ガラスの間から表を眺めた。——丸く、丸く、ただ丸く、モクモクモクと盛り上った雪が、線路の両側に果しなく続いている……。

「――こりゃアえらいことになりそうだぞ……」
百根は、思わず溜め息をついた。――昨年の裏日本大雪害を思い出したのである。
「――いけね！　あれも〝越路〟だったッけ」
そう、雪の中に立ち往生して、三日がかりでやッと脱出し、鉄屑のようになって上野駅へ辿りついたのは上り急行〝越路〟であった。
「ちょッと……、カレチさん」
百根は、通りかかった専務車掌を呼び止めた。――カレチとは、客扱い列車専務車掌の鉄道用語である。
「はア……」
専務が、好意的な目を向けた。――専門語で呼ばれたことに、百根が特殊な立場の人間と感じたからであろう。新聞記者は、この手をよく使うのである。
「どう、時刻表通り？」
「いまのところ、二十分遅れですが……」
「小出までは？」
「行けるでしょう」
「行けるでしょうッて……」
「なにしろ、大雪注意報が出ていますから……」
小出着は十六時五十七分着の予定だ。あと一時間ばかりだが、既に二十分遅れている。まだま

だ遅れるかもしれない……。
百根は落着かなかった。
「――一杯やってくるか……」
この急行には、食堂車はついていないが、軽食堂車がついている。
百根は、アノラックの襟をちょいと引っぱってから、立ち上った。
一応、パリッとしたスキーヤー・スタイルである。
通信部で、加藤のオーバーに手をかけると加藤が驚いて言った――
「――よせよ！　正月早々追い剝ぎは……。ま、あたしにまかしとき……」
加藤は、百根を近くの運動具店へ連れて行き、アノラックはもとより、ズボンからセーター、手袋からスキー靴まで揃えてくれた。
「――じゃ、頼むぜ……」
加藤は、店員へそう言っただけで、一文も払わず運動具店を出た。
「どう言う顔なんだい？」
「こう言う顔なのさ」
「僕が、月賦で払うのかい？」
「払えるのか？」
「払いたくないよ」
「まアいいさ。キップが手に入りゃアよし、入らなきゃア、運動具店の損さ」

「何ンのキップ？」
「あの店員は、あたしがスポーツ記者会のメンバーだってことを知ってる。で、店へ入るなり、ちょいと耳打ちした。――オリンピック入場式の切符一枚で、スキー服ひと揃えどうだい……。みんな、ノドから手が出るほどほしいんだ」
「手に入らなかったら、どうなる？」
「クヨクヨするなよ。まだ、三百日余りあらアね……」
こうして百根はスキーヤー姿で、五万円をポッポに〝越路〟に乗り込んだのだが、スキーは持っていない。
「――フフフ……、スキーなしのスキーヤーね」
ビュッフェでホットウイスキーを飲んでいると、華やかな笑顔が百根に近づいて来た。――二十七、八……。これもパリッとしたスキー服姿の女。大きな雪除けメガネをかけている……。
「やア……、田浦女史！」
「越後大湯でしょう？　加茂紅の一件？」
「君は？」
「あたしもスキーなしのスキーヤーよ」
「ちぇッ！　君と競争かア」
女は、器用な手つきでたばこを咥えると、ニッコリ笑った。
「競争する気はないわ。あんたは東京でたたき上げたベテラン、太刀打ちが出来ないわ」

「おだてるなよ」
「本音よ。大体うちの男共と来たら、召集かけても、ひとりもいないのよ」
田浦みさおは、そう言うと、煙といっしょに溜め息を吐き出した。
京都にも、幾つかの日刊新聞が出ている。京都の府紙とも言うべき京都新聞を筆頭に、大小六紙は数えられるだろう。
田浦みさおは、準府紙格のデーリー・京都の東京支社員だった。
「デーリーさんの男共は幸せだよ。うちにゃ田浦女史のような美人はいない」
「有難う……。お正月早々美人だなんて言って貰って、お世辞でも嬉しいわよ」
「しかし、競争相手現わるかア……。こいつアノンビリしていられないなア」
「からかわないで。こちらこそお手やわらかに願いたいわねエ。あたしはもともと小説や絵かきさん担当なのよ。こんな仕事、生まれて初めてだわ」
「いいでしょう、いいでしょう。こりゃア飛んでもないところへ来たと思ったが、田浦女史といっしょとは、楽しいことになったなア」
〝越路〟は、四十分遅れで小出駅へ辿りついた。
日はとっぷりと暮れていたが、駅の待合室には、かなりのひとがたまっていた。
「――新潟発の列車、ストップらしいわね」
立ち止まって、駅のアナウンスを聞いていた田浦みさおが、溜め息まじりに、百根を見上げた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton